
ブリミルと一緒に「ゼロの使い魔～二次創作～」

もず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリミルと一緒に「ゼロの使い魔」二次創作」

【Nコード】

N2715S

【作者名】

もず

【あらすじ】

タイピングのれんしゅうです。

いやになり次第辞めちゃおう、とか軟弱な事おもってます。

きれいなお姉さん、あるいはかわいい幼女、私のことを叱って下さい。

びつくりするぐらい喜びます。

褒めると伸びる子です。褒められてから忠告されるとさらに伸びる子のような気がします。

オリジナル、俺TUEEEEEが嫌いな人はそつと無視して下さい

あ。

誤字脱字は面倒ですが、無かったことにするべくきっちりがつり
しっぽり直します。ご指摘ください。

まえばなし

ぽかぽか暖かい日が木々の間から照っていた、風はまだ寒い、遠いところで鳥の声が聞こえる、鳥たちが騒がしい所から雨は当分降らないのだろう。

この季節は、ひと雨ごとに暖くなるから、雨が待ち遠しい。

この森に引っ込んでから5000年ほどになるが、今でもなぜか春になると、ノスタルジックな気分になってしまう。

森に入るまでの忙しさ、にぎやかさ、煩雑として、それでいて毎日が充実していたような、記憶の美化のような気がしないこともないが、最近ひどく懐かしい。

もそもそと掛布をどけて杖を取り、ひと振りして着替え、洗顔、歯磨きをします。

私の同僚であったブリミルの嘆願書によれば、そろそろのはずである、もう、大地の限界も近いだろうと、私の感覚もそう告げている。それでも伊達に東の果ての魔導師と言われていない、そのぐらい分かっている。

それにブリミルに似たような魔力の質の子が今現在2人いる。

一人はとても聡明な子のように安心した。ブリミルのように直線的で実験バカだと困るな、と思っていたが、そうでもないようだ。

もう一人は、まだ小さすぎてわからないが、男の子、ただこの子は親の愛が足りなくなる運命にあるようだ。真っ直ぐ育ってほしいなあ、と思う。

まだまだ私の出番は先のようなだが、それでもこのうすら淋しい生活とおさらばと言うだけで、ほんの少し心が躍る、最後の連れ合いを亡くしてから、散らかし放題で無造作の寒々していた部屋を見渡す。

手の入っていない古ぼけた家具たちが無精具合を表している気がし

て、苦笑を浮かべた。
今日も森の散歩にでも行くかと、家を出た。

ヘネの原始林は私の住んでいる森だ。ガリアの下にあり、他のところでは到底見かけない生き物が、食物連鎖を最大スケールでダイナミックに繰り広げている。

エルフも人も一切見かけない、唯一人型の生き物は私である。あくまで人間っぽいだけであって、ブリミルの実験の中で人間を辞めた、あるいは辞めさせられた私は人間ではない。

正確にいうと、幽霊である。実体のある幽霊。

となると、「おまえは生き物か？」とツツコミが入ってくるが、ごめんなさい、そういうことにして下さいとしか言いようがない。
中途半端な身なのだ。

このままブリミルの直系に呼ばれるまではだらだら日々を過ごすことになりそうである。

まえばなし（後書き）

心から尊敬、またお慕い申し上げている時雨沢恵一さんは毎回あとかきが本気です。

私にはムリゲーなので普通に書きますね。

次の回に愛しのsweetie x 2ルイズたんが登場します。

ワルドは積年の仇敵、あるいは親の敵のように嫌いです。

スピーディーにぬつ殺すことを皆様に誓います。

しろいかがみ（前書き）

むらさきかがみ

しろいかのみ

日々が過ぎた。最近では一日一日でカウントするより、一週間を最小単位にすればいいんじゃないだろうか、と思い始めた。

春になるとノスタルジックになってしまふ。だが今年の春は特別だ。もうブリミルの直系が出そろってしばらく経つ。そろそろ私の出番ではないかと、一昨年からスタンバイしているが、今だ来ず。今年こそは、と思っている。

ぼーっとしているとざわざわっと周囲に魔力が広がってきたのがわかった。ついに来たかとロープを纏い、杖をポーチに入れ、前を向く。

白い鏡が浮かび上がってきた、私はどのような若き迷える子なのか期待しながら歩を進めた。

そこそこの良家のお嬢さんに見える桃色ブロンドの少女が、服やロープを煤けさせながら、地面が親の敵なのだろうか、杖を上下させては、地面を爆破していた。爆発が起こるたびに周りにいる同じロープを着た子供たちがなにかヤジを飛ばしている。その生徒たちは各々自分の召還した使い魔を連れて、ある者はニヤニヤしながらある者は眉をひそめながら、桃色の少女を囲うようにたっている。

その子供たちとはかなり年齢が離れたように見える禿頭のメイジがいた360度どこから見てもここは学校のようなのだ。

桃色の少女が一際大きな声を張り上げ杖を振り下ろした。

召還魔法の失敗による大爆発が起きた、生徒に囲われた円のさらに奥桃色の少女のいる中心部には豪華そうなローブを着た、とんでもない魔力を放つ青年が立っていた。

この場を任されたのであろうメイジが、杖を構える。いつもの彼を知る人からすれば、どれほどの異常事態か分かるほどの殺気を放つて。

するとどこから見ていたのであろうか、さっきまでいなかった、老練の風格を醸し出す、長い髭をなびかせもう一人のメイジが現れた。

さっきまで騒がしかった子供たちが、まるでそこにいないかのように静まりかえった。

若いほうのメイジが先制を取ろうと呪文を唱え始めようとしたが、老練のメイジがそれを押しとどめ、風の最高たる所以である風の偏在を見せつけ、小声で、生徒たちを、と言った。

若いメイジはその声で我に返り、炎の弾幕をはり生徒たちを逃がそうとした、ただ一人、桃色ブロンドの髪の少女をのこして。

生徒があらかたいなくなったのを確認し、老いたメイジは朗々と青年に声を掛けた。

「そちらに、戦いの意思はあるか。」

普段とはかけ離れた声の鋭さ、口調。

歴戦のそれは、見ていたものに一層、事の重さを認識させた。

遠巻きからは緊張の為か、ため息が漏れて、聞こえる。

静寂が場を支配した。

爆心にいた青年はゆったりとした調子で腰から杖を抜いた。

より一層緊張が高まり、生徒たちからは、長きにわたって戦ってきたメイジの背中がより頼もしく見えた。

青年はその杖を逆さに持ち横に振る。すると、老練のメイジの背

中から張り巡らされた殺気が解かれ、脱力した。

生徒たち、若いメイジから事態を呑み込めていない空気が漂ってくる。老いた方のメイジが杖を仕舞うと、「すまんかったの。ここはトリステイン魔法学園、わしは校長をやっとるオスマンじゃ。お主は？」と声をかけた。

「私は、東の果ての魔導師だ。ブリミルの導きにそって呼ばれてきた。私を呼んだものは？」

予想外に優しい声、柔和な態度に今度こそ後ろから安堵の声が聞こえた。

しかし言った内容を理解し、また違う意味で強張った。なにせ相手は始祖の時代から生き残っている、唯一の歩く伝説なのである。しかし、恐れ知らずの少女が前に出た。

「私です。このルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが呼びました。私に力を貸して下さい、使い魔になって下さい。」

周りがざわめいた、いや、ルイズが死ぬとさえ思ったものもいた。主と使い魔とは、完全な上下関係。それを伝説の魔導師に頼む。それはあまりにも無謀で、あまりにも自殺行為である、と生徒たちの目に映った。

「そうかそうか、こんなに可愛い子が新しい主とはな、ブリミルも私にサービスでもしたつもりかな？私の名前はアルフォンス。アルって呼べばいい。あとため口で構わない。見た目の年齢は大して変わらないだろ。」

拍子抜けするほど、軽い返事が返ってきた。あたふたしてたルイズが契約の呪文を唱え終わり、はっとした様子でアルの顔をみて赤くなった。

覚悟を決めたように近づき口づけをした。

「これで私は久しぶりの使い魔生活だな。虚無はどのくらいまで使えるんだ？独学だろうから初級ぐらいは何とか出来るか？」

周りからははてなマークが飛び交う、飛び交ったのちにとんでもないビックリマークが出る。ざわざわざわっと生徒たちの間で会話が始まる。そしてたまに馬鹿にしたような笑いが聞こえる。アルはきょとんとした顔でルイズをみる。もとから背の低いルイズがさらに小さくなっていとをかし。

「魔法…。使えないの。ぜんぜん、まったく。」

「っん？始祖の秘宝を使っても駄目だったのか？ルイズはなかなか見どころのある魔力量をしているから、練習すれば使えるはずだぞ？」

「でも！…練習しても使えないんだもん。使い魔で魔導師ならなんとかしてよ！」

強がって語気を荒げているが、顔はいまだ真っ赤なままだった。

「ふーん。まあ、じゃあ初歩の初歩、‘エクスプロージョン’かな。」

「どうすればいいの？」

上目遣いで泣きそうになっている。さっきちっさくなってから大きさが一向にかわらない。丁寧にひとつひとつ呪文を教えて、イメージを伝える。

「……最終的には対象を小さな粒に分解させるイメージで爆発させるんだ。」

「爆発！？結局私の魔法は爆発しちゃうの？」

周りから大笑いが聞こえる。

アルはそれをきよろしうして見て、爆発させれるの？と小声でルイズに聞いた。

ルイズはぶくつと頬を膨らませ、そっぽを向き、泣きそうな声でできるもん、とつぶやいた。

「なんだ。できるのか。じゃあ…」

アルが思索してるうちに少しばかり疲れた様子のオールド・オスマンが声をかけて来た。

「なんじゃ…。頑張るのもいい、だがの、とつくに今日の終了予定時刻を過ぎ取るのじゃ。皆のものも疲れておるじやろうからの。各々部屋に戻ってよいこととする。ルイズ君とアルフォンス君はわしの部屋に来ておくれ。」

そう言っオスマンはふっと空気に溶けて消えていった。

しろいかがみ（後書き）

カッコいい老人、中年大好きです。

でもでもでもでもでもでも

ルイズたんの方がずっと好きだー！ー！。

っていうことが言いたいお話でした。

ついでに言つとくと紫鏡って言葉を20歳まで覚えていたら死ぬんですってね。

私は来年までに忘れなきゃいけないんですよ。

誰か忘れる方法でも考えてくれませんかね。

おはなし（前書き）

かわいいるいずいるいいわか

おはなし

消えてしまったオスマンの代わりに先ほどいた若いほうのメイジが近づいてきた。

少しばつの悪そうな笑顔で、先程はすまなかった。私はコルベール、こちらに。と言って向こうに歩き始めた。

付いていくアルとルイズは、ぼそぼそ喋っている。

「ルイズは、初歩の初歩しかできないわけね。でも大丈夫、伊達に魔導師じゃない。世界一の魔法使いに仕立ててあげるよ、ルイズ。」
「ほんとかしら？今まですごい高名な人たちに見せても、一回も良くなったことないんだから。」

いじけて、あひる口になっている。

「ははっ、この世で私より高名な人間がいれば呼び出してくれ！会って挨拶がしたいよ。」

「もうっ、そういうことを言ってるんじゃないかって…」

「着きました、ここがオールド・オスマンのいる校長室です。」
そう言って彼は重々しい扉を魔法で開けずに手でぐっと押して開けた。

アル達と入れ違いで緑色の髪をした女性が出て行った。ほんのり嘘の匂いがした。

中には予想以上に装飾が少なくすっきりしていた。

一人分のように見えるソファーには、伸縮の魔法が掛けてあり人が近づくと伸びるようになっている。

細かいところで高級品が使われているのがわかる作りになっていた。良く来たの、そういつてオスマンが重厚な椅子から立ち、来客相手のソファアーに腰掛けた。

「普段だったらの冗談の三つや四つ言うのじゃが…。相手が相手だけに意味がなさそうじゃの。いきなりじゃが本題に入ってもいいかの。」

コルベール、ルイズ、アルの順で見渡した。

「ルイズ君が虚無を使えるとはどういうことかの？あときみに使い魔の紋章が無いのはなぜじゃ？この二つが気になっておつての。」

「まず二つ目から。説明が簡単ですからね。」

おもむろにアルは羽織っていたローブを脱ぎ、カッターシャツと下シャツをまくった。

すると胸から鳩尾にかけて刺青のような、字が書いてあった。

「これが紋章。紋章付与の時に痛がらなかったのは、呪文で痛みを消したから。簡単でしょ？」

そそくさと衣服を正していく。

「なるほど、得心がいった。では一つ目の質問に答えてくれんかの。」

「私もそれが気になるのですっ」興奮気味の空気を出しつつ、コルベールが身を乗り出した。

「それは…。説明と言われると難しいんですが、ざっくり言うと、ルイズは始祖の血が濃くて虚無が使えるっていうだけのことですよ。なにせブリミルが決めたことですから、私の文句言える範囲ではないですし。」

「では何故始祖ブリミルは、そう決めたんじゃ？」心底不審げな眼でオスマンがアルの顔を覗き込む。

「それは、おそらく世界に何かしらの変革が必要だからじゃないで

すかね？詳しくは聞かされてなかったし、嘆願書にも書いていなかったから、なんともいえませんが。」頬をぱりぱり掻きながら答えた。

コルベールとオールド・オスマンがこちらを見て小首を傾げた。

「ああ、すいません。嘆願書っていうのは、ブリミルが死ぬときにおまえは消えないし死なないからと言って俺に託した書き置きみたいなのです。まあほんとの事そのの指示に従ったらこの子に呼ばれたわけですよ。」

ちらつとルイズの方に目を向けるとつまらなさそうに足をぶらぶらさせていた。

ルイズははっとこっちに気付き、恥ずかしそうにアルをみて肘で小突いた。

「ついでに、ルイズが虚無だっことは隠してもほぼ無駄だと思うけど……。一応公表しない方がいいね、せめてそこそまでの虚無を使えるようになるまでは。」

ルイズが何か言いたそうに目くじらを立てたが場所が場所なので我慢したようだ。

「その意見にはわしも賛成じゃ。ではしばらくはルイズ君を鍛えてやってくれんかの。それはそうと当座の生活はどうするんじゃ？」

「ルイズと一緒に生活しますからお気づかいなく。」

「えっ……！」

そこでルイズは思はず声をあげてしまった。

全員がルイズの方を見ると、あたふたしながら、

「い、一緒に生活って、、それは、その、そういうことよね？」

「まあ、そういうことだな。大丈夫、私は使い魔だから、主の嫌がることはしないし、主従は一心同体だからな」

「当人同士がそれで良いなら、校長のわしは何も言うことがないのだが…、どうじゃ？」

オスマンは口角を少し挙げて言った。

「大丈夫です。使い魔ですから。一緒に暮らします。」

ルイズは観念したかのように同意した。

「よしっ、では解散かの…」

ゆっくりオスマンが腰をあげようとすると、今まで黙っていたコルベールが口を開いた。

「東の果ての魔導師である、アルフォンス殿に尋ねたいのですが、火の魔法とは破壊にしか使えないのでしょうか？今まで長年生きてこられたと思うのですが、いかがでしょうか。」

真剣な表情のコルベールをじっと見据えて。

「そうですね。基本と応用がまったく違うものは世の中ままあります。基本的にはやさしい人でも心を鬼にしたら何でも出来ちゃうように。こつから先は私が答えを出すと貴方の人生を歪めてしまいうんですから、黙つときます。どうしても知りたかったら横の、狐か、狸のようなご老人に聞いてみたらどうですか。」

そういつてアルとルイズは部屋を出た。

しばらく部屋では誰もしゃべらなかった。

おはなし（後書き）

回文って作るの難しいですね。

今回はあんまり力が入ってません。

なぜかというと、次回によすべく、ルイズさんとの絡みを書くからです。

早く終わらせたい感マックスでしたが、読んで頂いてありがとうございます。

そろそろオリジナル成分が爆発しますがご了承ください。

おおむかしはなし（前書き）

予定は未定

おおむかしばなし

騒がしい人ごみをすり抜けている。外の脅威など忘れたかのようなお祭り騒ぎだ。

まわりの村々合同のお祭りだが、師匠の姿は見えない。またも原始林に籠っているのだろう。

遠くのほうからスレンダーなエルフの女性が肩を怒らせながら歩いてきた。ぎゅっと寄せられた眉全体から、怒っているんだぞ、という声が聞こえてきそうな勢いだ。

「また！またなのよ！！」

ものすごい勢いで歩いてきたかと思うと、きゅっと目の前でとまりそう叫んだ。

今度はそう叫ばれた、青年のほうが眉をひそめて、どうしたの？、と言った。

「よく聞いてくれたわ！！ブリミルったらまた魔法の研究って言わずに、私に実験したのよ！しかも今回はどこかわからない所に飛ばされたの！信じられる？私ってパートナーよね？ブリミルの使い魔よね？おかしくない？行った先では狼みたいなのに襲われるし、見たこともない服を着た男の子と倒したんだけどね、でもでもそういう問題じゃないわよね？何かをどうしても飛ばしたいならアルでいいじゃない。ねえ、アル？」

怒涛のように自分の主に対して文句を言い、少しすっきりしたようだった。

「最後の一節以外には大賛成かな。」

アルと呼ばれた青年は苦笑いしながら答えた。

それを聞か聞かないかのうちにエルフの女性は何かに興味が移ったのか、露天の方にふらふらと歩いていった。

取り残された青年は、当初の目的通りに師匠の家に向かって歩を進めた。

「ブリミル！ここにすることはもう割れているんだぞ！」

大声で呼びかける。そうすると中から、のそのそと出てくる人影があった。

出てくる気がないように見えるほど、のそのそしていた。

「ブリミルか？」

声をかけると、うー、と情けない声が返ってくる。

「しつかりしないとまた師匠に内緒で実験したことばらすぞー」

それを聞くや否や、今まではただの動くぼろローブだったのが、元気なぼろローブに変身した。

「ちよつとまった、アル、話せばわかる。絶対にわかる。」

「師匠にどやされれば良いんじゃないですかー」

アルの黒目はあさつての方向を向いている。

「使い魔のお前に対してのどやしと、俺に対するとやしでは一線を画してるんだって！ほんとなんだって！」

あわてたブリミルが駆け寄ってきて、アルに抱きついた、耳元でぼそぼそ言っている、

「な、ごめんてば。ちゃんと話し聞くからさ。」

「そついう問題じゃなし。」

アルはいじけたようにそつぽを向いてすねたフリをした。

「それよりさ、何しにきたんだ？師匠は出てるぜ？」

「お前がとってきてほしいってた霊石だよ。なんだよ忘れてたんなら取りに行かなきゃよかった。」

アルはブリミルの強引な話題変更方法に不満を隠せないようだ。

「おお！待ってました。さすがは天下に名高い魔導師の使い魔アルフォンス様！」

ブリミルはこういうお調子者なのである。

「さっそく実験に使っていいか？」

「　　良いよ？別に。」

「そうと決まればこっちこっち」

「んあっ」

こと実験になると直線的で前しか見えないバカに手を引かれ「ぶりみる」と書いてある、実験室に連れ込まれた。

「なあ、説明は無しなのか？ちらつとでも説明する義務がお前にはあると、俺は心のそこから思うわけなんだが」

「でつきた！」

その声と同時に足のないアルフォンスが完成した。

おおむかしばなし（後書き）

ルイズさんの萌え萌えきゅんきゅんたいむを書こうと思ったんですが

あんまりオリジナル設定が皆さんの頭の中で暴走しないうちに触るところになって

今度こそは！とか心に秘めちゃったり。

別にBLを意識したりとかは金輪際ないんだからね！

いっせえん（お揃えん）

いっせえん！

「はん

二人は部屋にいた。西日が窓からほぼ水平に差込み、ベッドにアルの姿を投影してる。

外からは上級生の男子生徒が魔法スポーツをしている声が聞こえる。聞こえるほど静かなだけである。

今、ルイズは魔力コントロールの練習のために軽く眼を閉じ、深く深く呼吸している。

カッターシャツから少し透けて見える下着ごと胸がゆっくりと上下してい、部屋に入り脱ぎ捨てたマントがルイズの座っている椅子にかけてある。

風が強いようで遠くにある火の塔の横の木が小刻みに揺れている。

いきなり、がたがたと音を立てて窓がゆれた。

その音に呼応するようにルイズの方が、びくつとした。かと思うとベッドに飛び込んだ。

先ほどから10分ほど集中しては途切れての繰り返しである。それほど疲れるものなのだ。

「ほんとにこんなので魔法が使えるの？」

掛布の上をごろごろしながら不審がった目でこちらを見てくる。動くたびに甘いにおいが部屋中に広がった。

「さっきも言っただろ？虚無には魔力コントロールが不可欠なの。あきらめな。」

横目にチラッとルイズを見ていった。

「ほらほら、ラストラスト。」

「んもう！」

ベッドの上で女の子座りのまま集中にはいった。

そうは言ってもさすが主従関係だけあって、会ってまだ半日もたっていないのにすごい信頼関係だ。

普通だったら、どこから来たかもわからない人間の言うことを、ここまで信用しないだろう。

校長室でもまるで数年来の仲のような気がした。

思索にふけていると、部屋がもう薄暗くなっていた。

横にある杖をとり蝋燭をつけていった。

薄目の先が明るくなったような気がした。

そんな気がすると同時に集中が途切れてしまった。

「もーおーだーめ！疲れたんだもん！」

そのまま枕に顔をうずめた。

「もういいよ。お疲れさま。ご飯は食堂で食べればいいのか？」

「そうよ」

「いついく？ルイズはおなか減った？」

「いま」

わざとぶっきらぼうに答える。あつて間もないのに声を掛けられたり労われると、いちいち嬉しくなる。マントを探してきよるきよるする。脱いだあとどこにやったか忘れてしまった。

ルイズがきよるきよるしている。

椅子に掛けてあるマントを取って後ろから羽織らせ、前をしっかりと留める。

すそをはたいて皺を伸ばす。

ルイズは何も言わずに鏡の前行き、少し、にへらつとした後ドアに向かった。

そのまま小さいのに大またで食堂に歩いていった。少し可笑しくな
って笑って、黙ったままついていった。

食堂では生徒たちが雑談に花を咲かしていたが、アルたちを視認す
るとひそひそ話に変わった。

あまり気持ちよくない視線の中ルイズと食事を取った。

「あっ！」

いきなりルイズが声を上げた。

「どうかした？」

「お母様に連絡しなきゃ！あんたが使い魔になったってことを。」

「そういえば、手紙書いてなかったみたいだな。」

「うん、でも信じてもらえるかしら？いきなり伝説の人を召還し
ましたっていつでも無理な気がするわ。」

「まあ、良識のある人だったら疑うにちがいないな。」

「そうだ！私まだあんたが伝説って証明をみしてもらってないわ！
なぜかすごく楽しそうに、大発見をしたような顔でこっちを見てき
た。」

「なにをしてやればいいんだ？」

口の中にある肉類をワインで流し込んだ。グラスは空になった。

「あの…ね、ちい姉さまの病気を治してほしいの。」

「ふーん、別に直せない病気なんてないから大丈夫だよ？たぶん。」

「たぶん？！ほんとにいけるの？」

ルイズは興奮気味に身を乗り出した。

「見てみないことには、ね？」

ルイズは納得したようにご飯を食べだした。やけにるるんしながらの食事だった。
そのまま終えた。

部屋に戻ると、ルイズはお風呂に入るといつて用意を始めた。あんまり遅いんで、見かねたアルは杖を一振りし用意した。
少し口をアヒル口にし、不満げな顔をして。一式をアルからひったくった。

「ベー」

そういつて出て行った。
一人残されたアルはまた杖を一振りし体を清めた、便利なもんだ、とひとりごちた。

11はん（後書き）

まだきませんでしたね。

もうすぐ来ると思っんで待っててください。

次回は15禁の限界値に挑戦しますね。

べっど（前書き）

このルイズは18歳以上です。

べつど

髪はまだ濡れているが、身体の火照りは無くなってしばらくたつ。アルはあたしの髪の毛を丁寧な櫛で梳いている。黙っているのにおしゃべりしているような安心感、たゆたうような感覚にまどろんでいた。

アルが今日はどこで寝るつもりなのか、気が気でなかったが、そこまで問題じゃないような気さえしてきた自分に驚きを覚える。ひと房ひと房を手にとってまるで陶磁器を扱うかのような手つき。目の前の蝋燭がゆらゆら揺れているのが幻想的で、自分の部屋ではないようだ。

アルが持つてきたお香から細い細い煙がすーっと立っていた。たまに思い出したこのようにぶれる。

気付いたら肩を揉まれていた。髪もすっかり乾いていた。

眼を薄くつぶったルイズの肩をもんでいる。

訓練のせいで軽く疲れているようで、気持ち良さそうに顔をふにやつとさせている。

背中から腰にかけてマッサージするためにうつぶせにさせる。

少し不安そうに眉根を寄せてこちらを見たが、頬笑みうなずくと素直に寝転んだ。

体重の半分ぐらいをかけてルイズの服の上から背中を押す。ルイズの口から息が漏れている。

背骨から少し離れたところを指圧していき、腰まで降りる。指で押していても無駄な贅肉が全くとっていいほどついていない。

しばらくは首筋から背中、腰と繰り返す。緊張して昨日寝れなかつ

たのか、もう夢うつつだった。

腰から下がり、太ももと臀部を揉みほぐす、甘い声が聞こえる。太ももからふくらはぎへと手を往復させる。身体が温まってきたのが、手のひらから感じられる。

掛布を掴みルイズの横に寝た。首の下に腕を入れようとすると、いれやすいように頭を上げてくれた。

するするつと音を立て、腕枕をされた。肘が曲がり頭を抱えられる。左手で頭を抱え、ポンポンされ、右手で胸をなでられる。

くすぐったいのと、気持ちいいのと、恥ずかしいので頭がぐちゃぐちゃになった。自分でもわかるほど顔が熱く、真っ赤になってる。気付いたら、アルとの距離は全くなく、自分から身をすり寄せていた。

手で距離を取ろうとしたが、いきなり淋しいような気がして反対にぎゅっとしてしまった。

自分の予想外な心の動きに自分が一番パニックを起こしている。

キスをされた、パニックがいきなり治まった。キスをされてる途中に耳に手が来た。

優しく撫でられて、身体がさつきとは違う意味で熱くなってきた。貴族たるもの、幼少期の教育で教わり、そういうことは一通り知っている。

知っているからこそ…イメージが膨らむのだ。

ルイズにキスをしながら左手で耳を撫でる、背中に右手を持っていく。

ワンピース型のネグリジェを指で手繰り寄せる、ルイズが何か言おうとしたが、口を塞いだ。

わき腹を指でなぞると、小さくあえいでいる。ルイズは、何かを我

慢するように、両手をアルの首に回し、一層力を込めギュツとした。そのまま手を突起にもっていった。手のひら優しくさするようにする。

ルイズのキスがより情熱的になった。

しばらくすると、熱に浮かされた目でじつとこちらを見ている。ここまで来ると二人とも息が上がり、声なんて出なくなるほど熱くなっていた。

左手を鎖骨に移動し、右手は指で、すこし摘まむ。そのたびにルイズが身体をびくびくさせる。

あつい、と言ってルイズはネグリジエをポイっとする。

それを機に、アルの右手がルイズのもっとも熱されたところに行く。

するするっと手が下に降りて来た。自分では、もうここまできたら止められないし、止める気もない。されるがままに身体を揺らした。

布越しからアルの指が擦ってくる。お尻の方まで垂れていて、少しつめたい。

布に手がかかると、自然と腰が浮いた。そのまま布は離れて行った。触られたくないようで、心底触ってほしい場所に指が来た。

自分でも洗うの以外で、月に2、3回しか触らないところに。会って間もない男の指が押し当てられた。

これ以上ないほどの背徳感にちいさな胸がつぶれそうだ。

死ぬわけでもないのに、走馬灯のように一生が過ぎた。

自分でも指を入れたことのない穴に指が入ってきた。

そのまま指はゆっくり動いている、どう動いているかは分からないが、とにかくムズかゆいような快感が胸をいっぱいにした。身動き一つとれない。

ルイズが芋虫のように縮こまり、びくびく身体を震わせている。
いとしくなってしまう、キスをする。

中はとろとろで、それでいてかなり狭い。優しく時間をかけてほぐしていく。

恥骨あたりのポイントが気持ちいいようで、面白いように反応した。

ゆっくり指を抜き、代わりに違うものを入れた。

指が抜かれ、ほっとしたような、淋しいような、恋しいような気持ちになつていると。息絶え絶えな私にアルはゆっくりのしかかった、もっと太い物が入ってきた。

中は受け入れる準備が出来ていたらしく、息苦しいような気がしたが、痛みは最初の一瞬だった。

それから、ただされるがままに鳴いた。

奥にアルが来るたびに、何かが自分に襲いかかってきて、自分というものが摩耗していくような気がした。

アルはスピードを上げると、ちゃんとするから、と言ってあたしの腰を手でぐっと掴み、そのまま果てた。

同時にあたしも果てた、しばらく身体が跳ねるように動いた。入り口でアルのがびくびくしているのがわかった。しばらくそのままだった。

すると、ゆっくりとした動作でアルは杖を取った。

ルイズが放心しているのをしり目に、杖を取った。

最高に便利なひと振りをした。

ルイズの中にあるものをきれいにして、新しいネグリジェをルイズに着せ、下着も新しくする。

「あんだ、なんてことしてんのよ……。」

ルイズがなかば諦めたような口調でそう言った。

「責任は取るさ、何があっても私とルイズは運命共同体だからね。」

「あたしには婚約者がいるのよ!？」

「初耳。そうだったのか、それはまずいことをしたな。」

「どうするの、本気でどうすんのよ!あわーもうだめだわー。」

興奮が冷め、冷静になったルイズは事の重大さに気付いた。

「なに、ルイズの姉を治療する代金にするさ。あるいは婚約者をつぶすか?」

「物騒な事言わないで、あんたはすごく強いんでしょ?本気を出したら…」

あんなことをした後でも、一応婚約者の心配をするルイズに若干の嫉妬を覚えた。

アルは、何千年生きてても男は男だな、と思い苦笑いした。

「あにわらってんのよ?」

「なんでも…。まあ、どうしてもなるさ。それよりお休み、つかれただろ?」

いたずらっぽく笑ったアルに、ルイズはそっぽを向いて、膨れて、そのまま眠りについた。

しばらくすると、蝋燭も消えた。

べつど（後書き）

男性器でしょうじを破つても公共の本に載せれるなら、これも15
禁でイけるんじゃないかなっておもいました。
いけるでしょ！

だめ？

せーふなんじゃない？
だめ？

ちっさいこがすき

夜はまだ明けてない。青くてちっさいのがうるちよろしているせいで起きている。

敵意は感じれないがそんなにいい気もしないのが、ずっと引きこもりをしていた人間の悲しい性なのである。

ちよつと脅かしてやろうかと思ったが、ルイズの目を醒めさしては悪いと思い、やめにして、ローブをタンスから取り出し、出窓を開け、外にひょいっと出て行った。風はまだまだ冷たかった。

案外かわいい子が外にいた。身長にあわない長い長いスタッフを持って、風韻竜に乗っている。歳不相応な瞳はあやうい純粹を内包していた。

「話が…」口を開いた、薄い唇が幸の薄さを表しているようだった。「話がない人が、こんな月のない夜にうるうるしないだろ？何の用？」

青い髪は、エグランティーヌ嬢の髪色だった。ブリミルに似て直情的で、いつもキンキン声で私を追いかけていたのをふと思い出す。「母を…、助けてほしい。」

ひどく切羽詰った顔をしている割に、説明はひどくお粗末だった。しかし声に含まれた悲壮感、瞳同様に歳不相応だった。

「せめて、状況の説明ぐらいはしたらどうか？」

「おいそれと話せる話ではない。助ける気が少しでもあるか聞いた。い。」

「生きる伝説に対してすごい口の利き方だね。お嬢さんのなまえは？」

「質問に答えて。」

隠しきれない苛立ちが声の端々に見て取れる。苦笑いが出て、ため息もついでに出た。

「わかったわかった。少しはあるよ。事の次第によるけどね。」
相も変わらず肩に力が入っている。いつでも飛び出せるように力んでいる犬に似ている。

「母は精神を秘薬で犯され、妄想と現実の区別がついていない。おそらくだけど、エルフの薬。」

「病状はいいんだよ。死んでなかったら。背景の状況を聞いてるんだ。」

薄い唇を少しかみ締め、こちらを見据え何かをこらえた後、ゆっくり話し始めた。

要約すると、王家の継承争いの結果、父が殺され、自身の代わりに母が毒を食らった。

自分は形だけの忠誠を誓って生き残り、今日まで地獄のような任務をこなしてきた、ということである。

存外涙もろいアルは涙腺崩壊寸前だった。ぐっとこらえポーカーフェイスで話を聞いた。

「わかった。まず母親を正常な状態にしよう。そのあとにそのジョセフというのをどうにかしようじゃないか。」

「いつ？」

「んっ？治すのをか？」

「そう。」

「今から行こうじゃないか、まだ宵の口さ。」

そういつて久しぶりの本格的な虚無の呪文を唱えると、白い鏡が目の前に現れる。

青髪の少女の記憶から行き場所を引き出す。鏡が真ん中から開き、廃れた屋敷が目の前に姿を出す。

「ひどいな…、家紋さえクロスが入ってるじゃないか。」

アルが、誰に言うともなくつぶやく。

「こつち。」

それ以上何も言わずにすたすたと歩いていった。その背中が、驚くほど小さく、強かった。

途中で、老年の執事がいたが、青髪の子がぼそそと話すと、そのまま引き下がった。

奥まった部屋は荒れた中庭に面していて、この家がどのような状況であるかを、万の言葉以上に表している。

「あそこに。」

そういつて指差した先には、ぼさぼさの青髪の女性が椅子に座って、真つ暗な空をじっと見ては、うわごとのように何かをつぶやいていた。

「彼女が？」

「そう、私の母。」

感情が限りなくゼロに近い顔を、少しゆがめた。

「じゃあ、いい加減に君の名前を聞かしてもらえるかな？」

「タバサ。またはシャルロット・エレヌ・オルレアン。」

「ではあちらは、オルレアン公夫人だね。さて、ちょっとみてみようか。」

そういうと、杖も出さずに夫人を見つめた。

「エルフの人たちがごくたまに使う秘薬だ。また面倒な物を作ったね。」

そういうとやつと杖を取り出して、呪文を唱え始めた。

次の瞬間、部屋中に光り輝く術式が刻まれた。心臓の鼓動のように光が脈打っている。その中心にまったく何も起こっていないかのようにつに、ぶつぶつ呟いている女性がいた。

「これは？」

「解毒の術式さ。浄化するのに時間がかかりそうだからね。こつち

う形にしてるのさ。あとこの部屋にあの執事とシャルロットしか入れないようにしてる。ばれると面倒だからね。」

「そう」

そういつてシャルロットは少し力を抜いた。しかしまだまだ警戒を解いていないのがわかる。

「明日の朝ぐらいに昏睡状態に入って、…その後3日ぐらいたって起きてきたら治ってるはずだよ。執事に説明をして、一緒に帰ろうか。」

「わかった、呼んでくる。」

シャルロットと共に説明をして、学園にとんだ。

アルが部屋に帰ると、ルイズが丸くなって寝ていた。

アルはルイズの頬にキスをして、横に滑り込み、軽くぽんぽんとルイズをなでて、眠りについた。

椅子にはアルのローブが掛けっぱなしであった。

ちっさいこがすき（後書き）

初めて感想というものをもらいました。
まささんありがとうございます。

かえれよ。

とか

ふざけんなよ。

とか

消せ k s

とか

そんな感じのが来ると思っていたら、予想外に優しい声を掛けていただきました。

読みながらニヤニヤしてました。

この感じから察するに、批判がきたら、心がばっきばきになる気がします。

精神の鍛錬が必要ですね。

おうじよさま

王宮内に連絡が来たのは、日が落ちてからだいぶ経ってからだった。学園を取り仕切る、海千山千の老メイジ、オールド・オスマンから大至急にとの事で、マザリーニ宛てに手紙が来た。

書いていた内容をマザリーニから問いただと、伝説の東の果ての魔導師が使い魔召還の儀で原始林から出てきたとの事だった。

それからというものの、いきなり王宮は蜂の巣を突つついたように大騒ぎになった。

ある者は自分の利権が目減りするのを恐れ、ある者は偽者だと喚き散らし、ある者はこの今にも瓦解しそうなこの王国を救うための救世主だとあがめ、てんやわんやであった。

しかしこの鳥かこの中の姫には誰も一顧だにしない。

「大后殿、姫様、明日早急に学園に参りますぞ。」

気付けば皆々意見が一応まとまったようで、私と母上の前にずらっと並んでいた。

「あの方が王に就いてくだされば、この国も安泰です。アンリエツタ様とマリアン又殿さえよければ……。」

マザリーニがじつ、とこちらを見据えて言いづらそうにそういった。

「私は今後一切、政治にはかかわらない、と、ずっと前にいいました。それは依然変わりませんし、変えるつもりもありません。」

母上が毅然とそういった。

「では。」

マザリーニがこちらをみた。その瞳には有無を言わさない、そのような圧力が含まれていた。

「私はかこの中の小鳥ですもの。何も言うことはありませんわ。」

「明日は、お二方共に学園に参りましょう。かの魔導師です。最後に人里に姿を表したのは、もう1000年ほど前の話です。人柄に関する記述ですらあいまいなものばかりです、が、どうにかして王位についてもらはねばなりません。王がいないことでなめられていた外交もやりやすくなることでしょう。」

マザリー二は、ではこれで、といって慌ただしく歩いていった。明日のためにいろいろと準備が必要なのだろう。

私には何もすることがない。湯浴みをした後、始祖に祈りをささげ、空にいる方に心の中で愛を囁いた。

朝になると侍女たちが身の回りの世話を焼いてくれる。ぼーっとしていると、鏡の中には絶世の美女である姫君が立っていた。なんだから不思議な気分だった。

外に出るとすでに出る準備は完了しているようだった。

周りには百を超える兵士と、竜籠が用意されていて、わずらわしいことこの上なかった。

「さあ、学園にいきますぞ。一通りのことには対応できるように、対策を書きました。お目通しください。」

そういつて一層鳥の骨にふさわしい顔色の枢機卿が小さい羊皮紙の巻物を手渡してきた。

まったくもって読む気がしなかったが、横でじっと見られては読むしかない。

案の定、面白くともなんともないものだった。

空は雲がどんよりしていたが、学園のほうは日が照っているように、遠目からみえた。

おうじよさま（後書き）

短くてすみません、すみませんの「すみ」ってどという字が正しいんですかね？

最初っから原作なんてなかったかのように進んでいますが、これからそのつもりです。

展開は寝る前の布団で考えた妄想の爆発により決められたものですので。

妄想フレアとかなんだかどこかの誰かが題名に使ってそうですね。もうあるのかな？

気になる人はぐぐってください。

おつかれさまです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2715s/>

ブリミルと一緒に「ゼロの使い魔～二次創作～」

2011年10月8日23時24分発行